



Title	唐代塔式罐の型式学的研究：罐座を中心に
Author(s)	唐，麗薇
Citation	待兼山論叢．史学篇．2021，55，p. 29-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91475
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

唐代塔式罐の型式学的研究

—罐座を中心に—

唐 麗 薇

キーワード：長安・洛陽／副葬品／分類・時期的変遷／地域差

はじめに

塔式罐は、罐蓋や全体の器形が塔の形を模倣すると考えられている特徴的な焼物で、¹⁾ 墓への副葬専用品である。中国北方の唐墓を中心に比較的多く発見されており、隋唐考古学において注目されている文物の一つと言ってよい。本稿ではこの塔式罐を対象にして、いまだ不十分と考える基礎的な型式

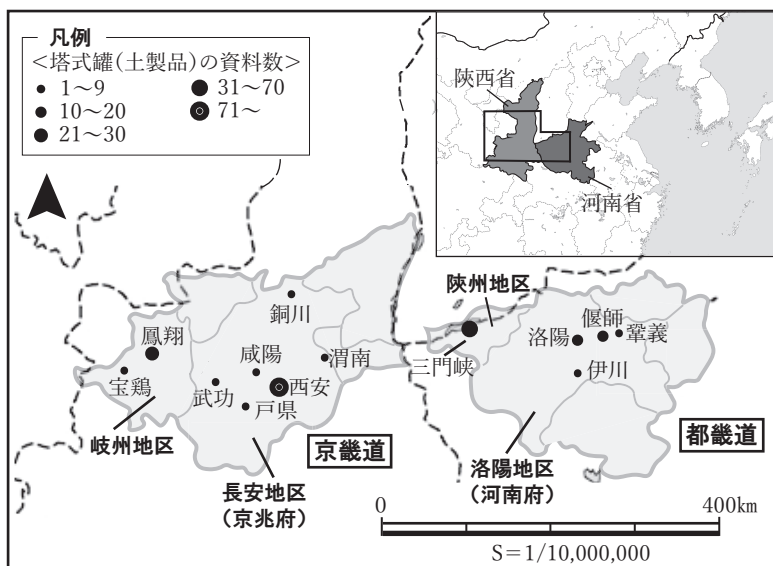


図1 京畿道・都畿道と塔式罐の出土分布

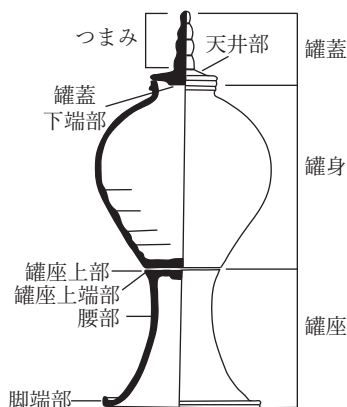


図2 塔式罐の部位名称
(一般土製品)

学的検討を試みることにする。

塔式罐は華北の各所から出土するものの、その中心を占めるのが唐代の都である長安・洛陽およびその周辺の唐兩京地方²⁾である(図1)。ただし、長安・洛陽周辺を重点的に取り上げた研究はあまり認められないため、兩都城の対比に視座を据えて検討を進める。

長安や洛陽出土の塔式罐には、三彩陶器や白磁などの精緻な製品も含まれるが、多数を占めるのは土製品である。これまでは土製・三彩・磁製の製品を一括

して扱う研究が通例であり³⁾、土製品に重点を置いて取り組む研究は少ない。そのため本稿は、少数の例外品とみなしうる、施釉の三彩陶器・磁器および貼り付けを施す特殊な土製品はひとまず検討対象から除外して、一般的な土製塔式罐⁴⁾を対象とする。

一般的な土製塔式罐は、罐蓋・罐身・罐座の各部位が別々に作られた3段で構成されている(図2)⁵⁾。その型式学的検討にかんする先学の検討には、後述するように着眼点や研究手法に課題が多い。本稿では罐座に着目することにより、長安・洛陽兩地域の関係性の復元を試みることにする。

1. 研究史の整理と本稿の課題

(1) 既往の研究とその問題点

まずは塔式罐にかんする既往の研究に対して、筆者が考える問題点について述べたい。

3部位完存資料を対象としてきた制約 塔式罐の実物資料数に制約があった研究の初期段階に生まれた認識に基づき、⁶⁾ 3つの部位の揃った塔式罐のみ

を完存資料として分析対象とすることが一般的であり、一部の研究⁷⁾を除くと、いずれかの部位が伴わない資料の集成や検討は行われていない。しかしながら、そうした認識に基づけば、明確な紀年をもち、存続期間・分布地域が限定される良好な資料も無視されることにもなりかねず、資料数の限られている現況において地域ごとの塔式罐の時期的変化を解明することも難しくなる。

例えば、西安市南郊の蔣少卿墓（657年）⁸⁾より出土した塔式罐は、罐蓋と罐身のみからなるが、この罐蓋は、塔形模倣の外部形態・中実の内部・円盤形の下端部といった特徴を具備することからして、普遍的な三段式塔式罐の罐蓋の形状と同一である。罐座という特定部位の伴わない資料を捨象するこれまでの研究（范・郝 2018、韓 2019）においては考慮されてこなかったが、上記資料は知りうるなかでは最も古い資料であり、当該形態が7世紀中葉頃に長安で成立した可能性を提示することができる。このような点をふまえて、本稿では3部位が残らない資料も包括して検討の俎上に上げることにしたい。

部位ごとの型式分類の必要性　これまで3部位が揃う資料を対象としてきた研究においても、多くの場合は、塔式罐の1部位にすぎない罐蓋や罐座の特徴のみを分類基準として塔式罐全体の型式とみなす傾向があった。罐蓋・罐身・罐座の部位ごとの型式学的分類やその組み合わせの検討がほとんどなされてこなかったことになる。しかし、複数の部位からなる塔式罐は、各部位の特徴を抽出したり、組み合わせ関係を考えたりすることで、塔式罐全体に対してもより有効な分類となろう。より確実な型式組列の抽出と編年の組み立てを可能にするためにも、各部位の形態変遷を個別に捉えた上で、組み合わせ関係や全体を考察することも重要である。本稿では紙数の関係もあって、それらを網羅的に対象とはできず、罐座を中心に一部は罐蓋を加えて検討するが、上記のような視座をもって分析を進める準備作業と位置付けたい。

特殊事例への偏重と一般土製品の詳細の必要性　上に指摘したような部位ごとの型式学的検討については、近年の楊萌氏の論文（楊 2019・2020）（図

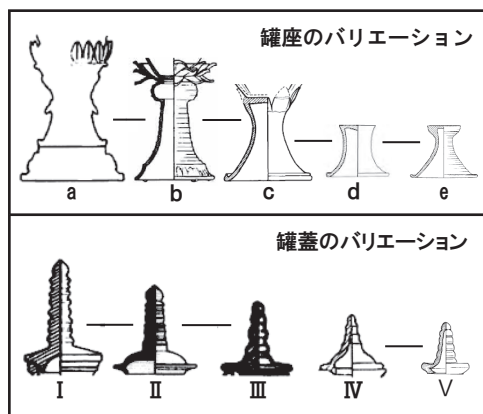


図3 楊萌氏による「塔式罐A類」における分類

3) のように既に試みられている事例もないわけではない。従来の諸研究と異なり、楊萌氏はA類と設定した塔式罐において、罐座を「座a～座e」に、罐蓋を「蓋Ⅰ～蓋Ⅴ」にそれぞれ分類を行なった（楊2019・2020）。さらに罐蓋と罐座の組み合わせ関係から塔式罐全体の型式分類が

考えられた点で、より有効な方向が提示されたといえよう。

しかしながら、楊氏が提示した分類案において、二つの罐座を組み合わせて用いるような製品や三彩の製品といった兩京地方において少数しか出土のない特殊事例と言えるもの⁹⁾を、多量に出土する土製の一般例と一括して検討している点にはやや問題があると考ええる。例えば、楊氏が考える最も古い罐座は図3で示している罐座a（710年、節愍太子墓副葬の土製品）であるが、それが出現する前にも、紀年が明確で簡素な土製品の罐座（693年、咸陽市武功県蘇瑜墓副葬、本稿の罐座Aa類に相当する）の出土が認められる。楊氏は、二つの罐座を組み合わせて用いる土製品→三彩・磁製品→簡素な一般的な土製品へという変遷を想定しているが、簡素な一般的な土製品の出土年代は、祖型とされているような二つの罐座を組み合わせて用いる土製品や三彩・磁製品よりも古く遡る可能性が高いのであり、一般的な土製品はむしろまずは独立させて検討を加え、その変遷などを解明すべきであろう。

また、一般的な土製品は窯跡での発見例がなく¹⁰⁾三彩・磁製品とは異なる生産地で製作されていた可能性が高い。このことから、土製品と三彩・磁製品は本来的には区別した検討から始めて総合するのが望ましいだろう。本稿では、やはり紙数の制約もあるため、一般土製品の器形のみを対象と

し、僅かに存在する特殊事例は今後別の機会に検討したい。

外形の重視による分類基準の曖昧さ 既往の研究においては、「完存資料」を検討対象としてはいるものの、さまざまな分類案が試みられてきている。一般的には、罐蓋のつまみ、あるいは罐座の外形を基準に分類が行われてきた。例えば、罐蓋のつまみの形態を「竹形」、「塔形」などに分けて分類基準を設定した例は多く見られる。¹¹⁾ しかしながら、そのような外形の違いにのみ注目した分類基準では、形態分類の曖昧さを回避することができないと考える。いわゆる「竹形」・「塔形」という分類の詳細についてはここでは立ち入らないが、つまみは複雑な形状で多様であり、従来分類では基準としての客観性を確保できないであろう。

そこで筆者が注目したいのは、内部の特徴である。後述するように、とりわけ複雑な形態を有している罐蓋は、外形のみならず内部にも大きな違いがある。こうした外から見えない部位には、デザイン性として個別の製品ごとに認められる差異ではなく、製作技法の差異およびそれに基づく製作工人の系統差が反映されている可能性が高い。¹²⁾

したがって本稿では、罐蓋・罐座の分類において、これまで取り上げられていなかった細部形状を含めた形態的特徴に注目するとともに、製作技術の違いや製作者の系統差が表れると想定される内部の特徴や断面形態などにも目を向けて、新たな分類基準を提示してみたい。

地域差を考慮した検討の不足 最後に指摘したいのは、これまでの研究において、多くが地域性を考慮していない点である。とくに、唐代の都として重要な位置を占める長安・洛陽の塔式罐の特徴を整理すれば、地域間で器形の共通性はもちろんあるものの、同時に相違点のあることも見逃せない。塔式罐の変遷を捉えようとすれば、こうした地域差を考慮した検討は欠かせないであろう。本稿では、ひとまず長安・洛陽の2地域をとりあげて、両地域それぞれの差異と変遷過程を整理することで、塔式罐の様相をより正確に捉えることを目指したい。

(2) 本稿の方針

以上の既往の塔式罐分類における問題点を解決するため、本稿の方針を簡潔に整理すると、①塔式罐の3つの部位それぞれの様相を個別に整理することを目指す、その準備として罐座に重点を置き、罐蓋にも触れつつ検討すること、②外形のみならず内部の特徴なども考慮して、できる限り客観的な分類案を提示すること、③新たに提示した分類案をもとにして、地域による差異などを把握すること、としたい。また検討にあたっては、特殊事例と一般的な土製品の例とを区別するために、ひとまず本稿では一般的な土製品のみを対象とする。

2. 塔式罐の分類

塔式罐を構成する部位のうち、とくに罐蓋・罐座は、罐身に比べて法量や全体の器形、細部の形状のバリエーションが豊かであり、型式学的な検討を加えやすい。そこで本稿では、罐座の型式分類¹³⁾と罐蓋の型式分類を中心に行いたい。

(1) 罐座の分類

型式	上部の形状		上端部	
A類	閉塞型		突出が不明確	
B類			突出が外方へ伸びる	
C類	開放型		外反してから内屈	

図4 罐座上部とその端部の模式図

新たに着目する要素として、罐座上部の形状を取り上げる（図4）。罐座の上部には、完全な面となる閉塞型と、中央が空洞となる開放型に大きく分けられる。この形状の差異について、閉塞型はおそらく土製品として誕生した塔式罐罐座の本来的な形状

型式		上面の 形状	上端部	全体的特徴
Aa類		閉塞型	突出が 不明確	幅が広く、 腰部が下に 寄る
Ab類				幅が広く、 腰部が上に 寄る
Ac類				幅が細く、 器高が高い
Ad類				幅が広く、 器高が低い
Ba類		開放型	突出が 外方へ 伸びる	幅が細く、 器高が高い
Bb類				幅が細く、 器高が中間的
C類				幅が広く、 器高が中間的

図5 罐座の型式とその分類基準（縮尺1／24）

であり、一方の開放型は8世紀中葉までの両京地方で見られる三彩同類品に同様の形状が認められることから、これとの何らかの関わりのある可能性も考えられる。いずれにせよ、両者は明確に異なる型式として区別しうるものである。

さらに、罐座上端部の形状には、突出が明確か、そうでないかの差異があるので、閉塞型のうち突出が不明確なものをA類、突出が明確に外方へ伸びるものをB類、開放型をC類に区分することにした。これらのA～C類は、法量や全体の形状によってさらに細分が可能である（図5）。

A類 腰部径と器高で全体の法量を検討すると（図6）、器高が高い一群（Aa・Ab・Ac類）と器高が低い一群（Ad類）を区分することができる。次に、全体の法量に大きな差のない前者の資料群について、形状の差異を確認すべく、図7で腰部¹⁴⁾のくびれ度合いに着目してみる。すると、腰部高

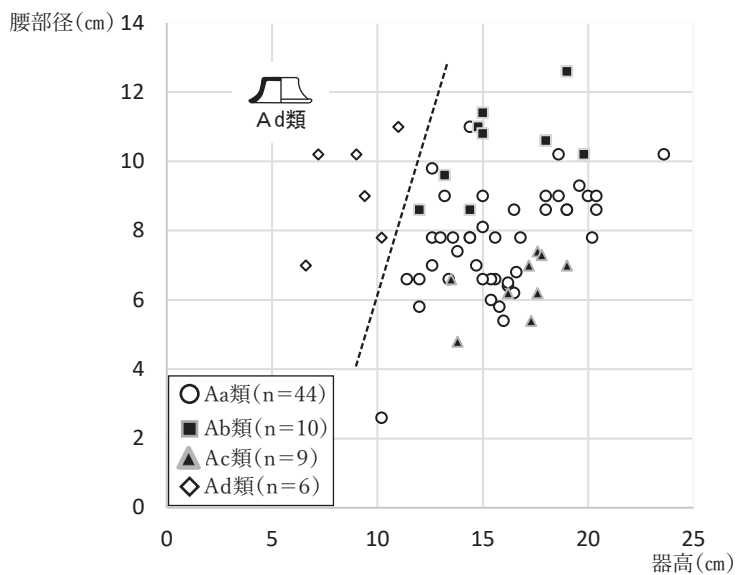


図6 罐座Ad類とA類の他の3型式の法量対比

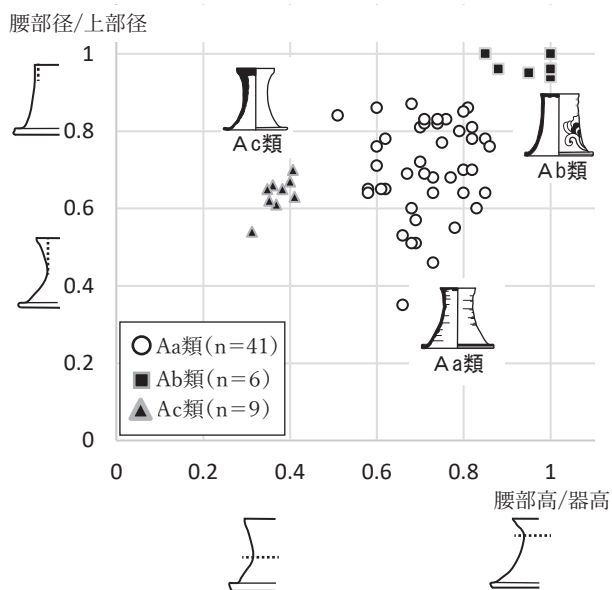


図7 罐座Aa類・Ab類・Ac類の法量分布

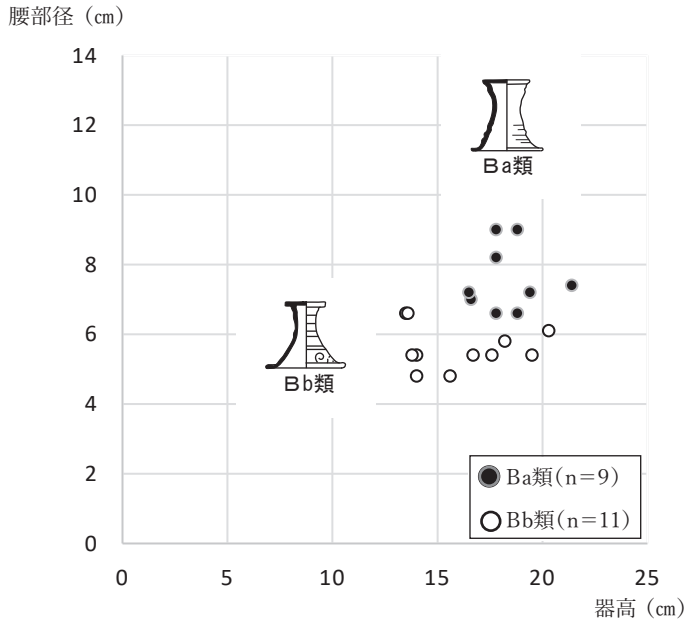


図8 罐座B類の法量分布

／器高、腰部径／上部径といったくびれの強さや位置を示す要素において、Aa・Ab・Ac類との三群に分けることができる。A類の分類の内容をまとめると、以下の通りである。

Aa類 基本的に幅が広く、腰部が下方に寄るもの。

Ab類 Aa類より幅が広いもの。腰部が上に寄る。

Ac類 幅が細く、器高が高いもの。Aa類に比べ、より細身な形態を呈している。

Ad類 幅が広く、器高が低いもの。

B類 腰部径と器高を計測し、全体の法量を検討すると（図8）、器高が高い一群と、器高が低い一群の2群が見いだせる。前者をBa類、後者をBb類とする。

Ba類 幅が細く、器高が高いもの。

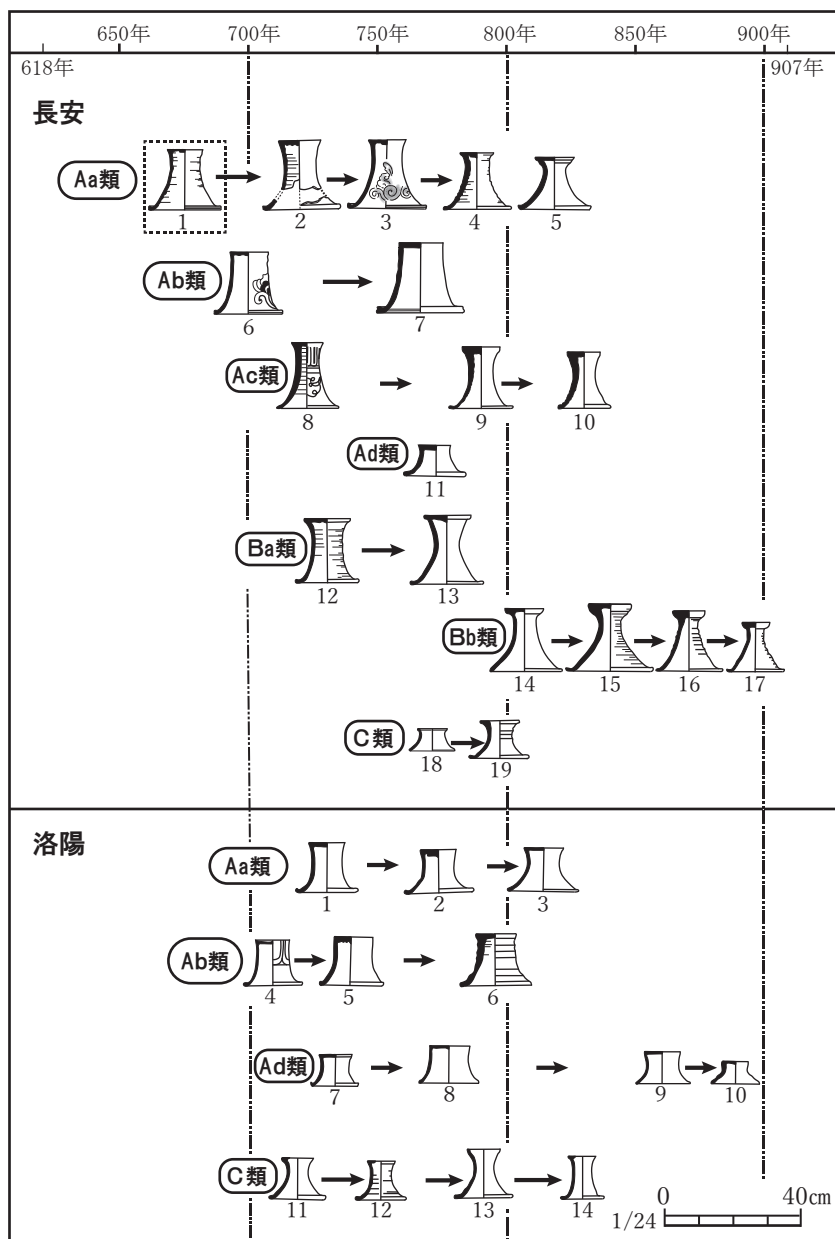


図9 塔式罐罐座の各型式の時期的変遷

Bb類 幅が細く、器高は相対的に低いもの。

C類 端部が外反してから内屈あるいは内屈きみな形態を呈している。幅が広く、器高が中間的であるもの。

以上の罐座の各型式の時期的な変遷は、紀年銘を有する墓からの出土資料などをもとにすると、図9のように整理できる。

(2) 罐蓋の分類

1章で述べたように、既往の研究では罐蓋の外部形態に注目する例が多く、罐蓋の内部、とりわけ罐蓋下端部の形状は、製作技法の実態を反映するため重要であるにも関わらず、これまで分類基準とされてこなかった。そこで以下では、罐蓋の内部に着目することにより、形態差の本質をより正確に把握できる、客観性の高い分類案を提示したい。

罐蓋全体の形を検討すると、塔形を模倣している点で共通する資料群のなかでも、天井部の膨らみの度合いによって、不明確な一群（A類・B類）と明確な一群（C類）に大別することができる。また、罐蓋の内部をみると、中実な一群（A類）と中空な一群（B類・C類）とがあることがわかる。このように、罐蓋においてはA～Cの三群に大きく分けられる。

B類については、さらに下端部の形状の差異に注目して、3つの小型式

型式		全体形状	内部	下端部形状
A類		天井部の膨らみが不明確、塔形模倣	中実	かえりなし、円盤形
Ba類			中空	かえりなし、玉壁形
Bb類				かえりあり、下方へ突出
Bc類				
C類				かえりあり、内側へ突出

図10 罐蓋の型式とその分類基準（縮尺1／10）

に細分しておきたい。具体的には、下端部はかえりがなく、玉壁形を呈するもの（Ba 類）、下方へ突出するかえりがあるもの（Bb 類）、内側へ突出するかえりがあるもの（Bc 類）の3種類である。

他の型式についても下端部の形状をみておくと、A 類はかえりがない円盤形、C 類はかえりが内側へ突出する形である（図10）。

以上、これまで着目されていなかった細部属性や法量・形態差の検討によって、より客観性の高い分類基準を追究してきた。その結果、新たな分類案として、罐座を7類型、罐蓋を5類型に分類するものを提示することができた。次にこれらについて、長安と洛陽の2地域を取り上げて、各型式の様相を整理してみたい。

3. 地域性の検討

塔式罐の地域性にかんする研究史における問題点としては以下の2つが挙げられる。一つ目は、河南道や関内道といった大地域の間での相違に触れる研究（袁 2002、程 2009、楊 2019・2020）はあるものの、河南道のうちの洛

表1 唐兩京地方墳墓における土製塔式罐罐座の地域分布

型式名	各型式 の比率	型式ごとの地域分布				地域ごとの型式分布			
		長安	岐州	洛陽	陝州	長安	岐州	洛陽	陝州
Aa類	39%	58%	5%	17%	20%	44%	20%	32%	34%
Ab類	12%	22%	45%	33%	0%	5%	53%	19%	0%
Ac類	7%	100%	0%	0%	0%	14%	0%	0%	0%
Ad類	12%	5%	16%	26%	53%	1%	20%	16%	29%
Ba類	6%	100%	0%	0%	0%	11%	0%	0%	0%
Bb類	11%	65%	0%	0%	35%	14%	0%	0%	17%
C類	13%	10%	5%	50%	35%	3%	7%	32%	20%

■ は最も高い比率

陽や陝州、関内道のうちの長安・岐州といった小地域間の差異の検討が十分ではない点である。二つ目は、小地域間の差異の検討が行われても、罐蓋のつまみ形態のみに基づく分類案（陳 2013）など、部分的な検討に依拠しているために、正確な地域性を把握できたとは言い難いことである。

そこで本稿では、小地域間の地域性の検討を目指し、なかでも唐代の都として重要な位置を占めた長安と洛陽を対象とする。具体的には、地域性が顕著に認められる罐座の地域性を検討し、次に罐座と罐蓋の双方の部位をあわせて塔式罐を俯瞰的に検討すべく、両者の組み合わせ関係にも注目する。

(1) 罐座にみる地域性

前章では、罐座の型式分類において、閉塞型と開放型の2種があることを重視した。これについて、長安と洛陽とにおける両タイプの分布を整理すると、大きな差異のあることがわかった（表1）。具体的には、長安では、Aa類をはじめとしたA類やB類の諸型式が普遍的に存在するのに対して、洛陽では、閉塞型のA類と、開放型のC類とがともに主要型式として併存し、B類はほとんどみられない。なお、上面が開放で端部が外反してから内屈する形を呈しているC類は、長安でごく僅かに認められる。このように、両地域は、罐座上部とその端部形状に共通性をもちつつも、強い独自性を有していることがわかる。

形状に加えて、法量にも着目したい。図11で、両地域出土の罐座の器高を検討すると、まず器高の平均値は、長

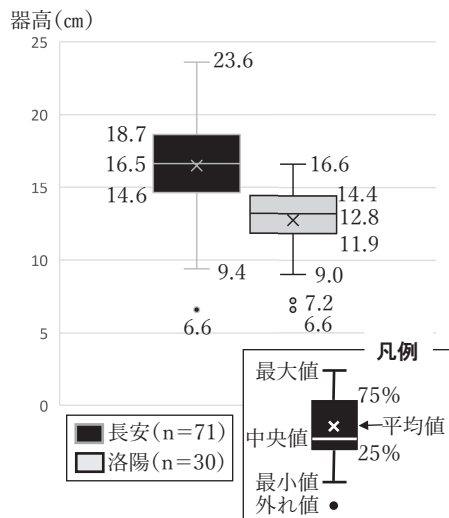


図11 長安・洛陽の両地域の罐座の器高比較

安で 16cm 前後なのに対し、洛陽では 13cm 前後とより低いことがわかった。総合的に値の分布をみても、長安に対して洛陽では相対的に器高が低いという傾向が認められる。

また、腰部の幅も含めて検討すると、長安特有な Ac・B 類は幅が細いという特徴が見られるのに対して、洛陽では前述のように幅の広い器形の個体が多いことから、洛陽よりも長安で細身な器形が多いという地域性が抽出できる。

さて、これまで述べてきた長安と洛陽の地域差をまとめると、①閉塞型で端部が外方へ突出する B 類は長安でのみ存在し、一方で開放型のものは長安で少なく洛陽で主体を占めること、②一般的に長安地区の罐座は器高が洛陽地区のものより高いこと、③洛陽地区と比べて、長安地区で幅がより細身な器形（Ac 類・B 類）がより多く存在すること、といえる。このように長安と洛陽では、同じく塔式罐が存在するとはいっても、細かくみれば地域差が指摘できるのである。

以上でみてきた、罐座上面の閉塞型か開放型かといった差異や法量の差異は、製作技術の違い、さらにいえば工人の系譜の差異に基づくものである可能性が高いことは重要であると考ええる。この点は、製作工人や製作地域にかんする検討を行う余地を有しており、今後の検討課題としたい。

表2 唐両京地方墳墓における土製塔式罐罐蓋の地域分布

型式名	各型式 の比率	型式ごとの地域分布				地域ごとの型式分布			
		長安	岐州	洛陽	陝州	長安	岐州	洛陽	陝州
A類	26%	88%	0%	10%	2%	51%	0%	15%	3%
Ba類	11%	53%	0%	47%	0%	13%	0%	31%	0%
Bb類	3%	100%	0%	0%	0%	7%	0%	0%	0%
Bc類	17%	55%	11%	30%	4%	22%	11%	31%	3%
C類	43%	6%	36%	9%	49%	6%	89%	23%	94%

■ は最も高い比率

(2) 罐蓋との組み合わせ関係について

罐蓋、および罐座との組み合わせ関係を検討するにあたって、まず両地域の塔式罐罐蓋の特徴を述べておこう。両地域では、ともに塔形を模倣し、天井部の膨らみが不明確なA類やB類が主体的に見られる。そのなかでも細かくみれば、中実なものは長安に、中空なものは洛陽に特徴的に分布するという傾向が明らかになった(表2)。具体的には、長安では、A類・Ba類・Bb類・Bc類が認められるなか、中実のA類が主体であるが、中空のB類の各種をあわせると約半分の割合を占め、A類とB類がほぼ二分して併存した状況を呈する。一方の洛陽地区では、Bb類が現状でみられず、残りの各型式の間の割合には大きな差がないという点が特徴であろう。

さて、罐座と罐蓋の組み合わせ関係を検討すると、両地域の間には大きな相違が認められる。長安で最も典型的な組み合わせは、「罐座Aa類／Ba類＋罐蓋A類」である。他の組み合わせでは、罐座の型式にある程度まとまりがあるのに対して、罐蓋は多様性が強いという傾向が認められる。例えば、「罐座Ac類＋罐蓋A類／Bb類／Bc類」・「罐座Aa類＋罐蓋A類／Ba類／Bc類」・「罐座Bb類＋罐蓋Ba類／Bc類」といった組み合わせである。

それに対し、洛陽では、罐蓋と罐座の組み合わせに一定の規則性がないという特徴がある。強いて言えば「罐座Aa類＋罐蓋Bc類」の組み合わせが多いものの、明確に典型的な組み合わせを抽出するのは難しく、長安と比べて無秩序な状況といえよう。こうした組み合わせ関係に地域性が見られる背景は、今後の検討課題としたい。

4. 罐座にみる両地域の時期的変遷

(1) 長安における変遷

図9に整理したように、長安の罐座の諸型式の時期的変遷の特徴は、①Aa類：8世紀前葉～中葉に大型化し、また時期が下るにつれて腰部のくびれ

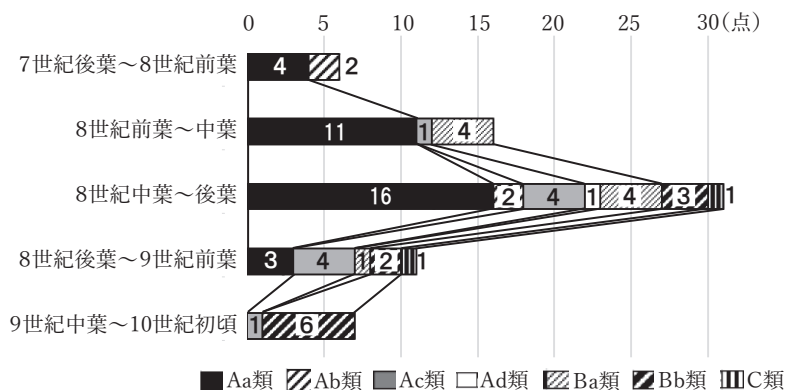


図12 長安における罐座の各型式の時期分布 (n = 71)

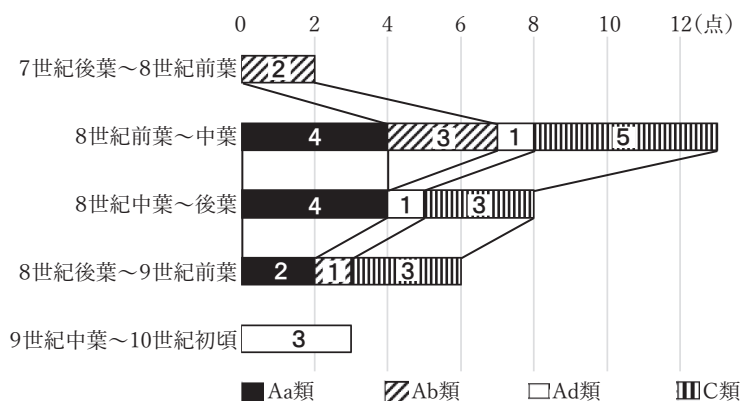


図13 洛陽における罐座の各型式の時期分布 (n = 32)

が強い一群が増える、② Ab 類：8 世紀中葉より大型化する、③ Bb 類：上端部の形状が、初期の 9 世紀初め頃の四角形から 9 世紀中葉以降のカーブ形に変化していき、9 世紀後葉には小型化する、とどのようにまとめることができる。また、大まかに長安の様相を整理しておくと、罐座が出現¹⁵⁾してから盛行へ向かう 7 世紀後葉～8 世紀後葉と、急激に減少していく 8 世紀後葉～10 世紀初頃との二段階に分けられよう (図12)。

(2) 洛陽における変遷

洛陽において罐座の各型式の時期的変遷（図9）について、まずC類は現状において器形も法量も時期的変遷を捉えることが困難であるため記述を控えるが、他の型式については、①Aa類：長安と同様に時期が下るにつれ、体部のくびれが強い一群が増える傾向がある、②Ab類：8世紀前葉から末頃にかけて徐々に大型になっていく、③Ad類：8世紀中葉以降から9世紀中葉以降にかけて小型なものへと変化していく、といった特徴が見てとれる。また、洛陽における罐座の時期ごとの数量の変化（図13）をみると、大きく二つの時期段階にも分けられるが、これは長安とはやや異なる。つまり、罐座が成立し急激な盛行へと向かう変化を示す7世紀後葉～8世紀中葉と、罐座が漸移的に衰退していく8世紀中葉～10世紀初頃との二段階である。¹⁶⁾

5. 今後の課題

本稿は、唐代の土製塔式罐の罐座と罐蓋について、内部などの形状や法量といった属性を取り上げて、これまでよりも客観性の高い分類案の提示を試みた。そして、長安と洛陽という2つの地域において塔式罐罐座の様相にかなりの地域性があるのかも検討してきた。こうした地域差が生じる背景の考察は、今後さらなる詳細な検討を経て進めていきたい。

さらには、同じく兩京地方における岐州・陝州なども含めた、より広い視野での地域性の把握なども今後の課題として挙げられる。また、現在はいくまで塔式罐の基礎的分析にとどまっているものの、他の考古資料や文献記録との突き合わせも含めて総合的に検証しながら、塔式罐の歴史的評価に向けても研究を進めていきたい。¹⁷⁾

[註]

- 1) 袁勝文 2002「塔式罐研究」『中原文物』第2期。
- 2) 「唐兩京地方」とは、唐代における西京であった長安を中心にして、関内道の南端にある京畿道と、東都であった洛陽が所在する河南道西端の都畿道という二つの地域を指す。京畿道は長安が所在する京兆府・岐州・邠州・同州・華州により構成され、都畿道は洛陽を中心とした河南府・鄭州・汝州・陝州・懷州を含む(譚 1996)。現在の行政区画からみれば、陝西省の南部と河南省の北西部に相当する。そのうち、現状において塔式罐の集中分布が認められる地域として、京兆府(長安)・岐州・河南府(洛陽)・陝州が挙げられる。本稿は紙幅の都合上、都の長安・洛陽を中心に唐兩京地方を対象地域とする。
- 3) 袁 2002、程 2009、陳 2013、李(軒)・李(軍) 2017、楊 2019・2020。
- 4) 本稿での「一般的な塔式罐」とは、唐兩京地方において多数を占めるものを指している。貼り付け装飾が施されない2段・3段の土製塔式罐、およびそれら塔式罐と共通する特徴を有するが、部分的に出土した罐蓋や罐座を対象とする。ただし、その定義に当てはまるものは長安・洛陽をはじめとする唐兩京地方に限られる。そこからの遠隔地である寧夏・河北・山西などの諸地域においては、貼り付け装飾が施された土製品や三彩・磁製品が一般的に存在するため、地域によって一般的な製品の形状などは異なる。
- 5) 塔式罐の材質・構成部位に最初に着目したのは袁勝文氏である。ただし、分類の着眼点が異なるためか、各部位が別造りであることについては、袁氏を含めて多くの研究者が注目していない。
- 6) 中国科学院考古研究所により編纂された『西安郊区隋唐墓』をはじめ、塔式罐が発見された初期に相当する1950、60年代の調査報告書では、執筆者は実物資料の数量に制約があったためか、罐蓋・罐身・罐座が揃っているものこそが完存資料で、特定の部分が伴わないものは、何らかの原因で壊れ、失われた残欠品であろうと認識していた。後継の調査者や研究者はほとんどその見解を自身の研究に引き継いでいる。しかし、後の註8でも触れるように罐座がない副葬用の塔式罐も存在していたと考えるべきである。
- 7) 范・郝 2018、韓 2019、楊 2020。
- 8) 本稿で触れた紀年はすべて埋葬年である。
- 9) 本稿で罐座について、以下の器形や特徴を有するものを特殊事例とする。
 - ①楊分類(楊 2020)の座aに相当する、上下二つの罐座で組み合わせられた土製の罐座。全高は49.2 cmにも達している、複合式の大型品である(渭南市富平県における節愍太子墓(710年)より出土)。
 - ②楊分類の座bに相当する三彩罐座(西安市西郊熱電廠唐墓M2より出土)。

③楊分類の座cに相当する、上面に蓮弁が数点貼り付けられている土製の罐座(唐金郷県主夫婦墓(724年)より出土)

また罐蓋では、楊分類での蓋Ⅱに相当する三彩罐蓋(西安市南郊唐墓 M31より出土)がある。

- 10) 塔式罐は現状において、長安・洛陽をはじめとする唐両京地方には耀州窯産の少数の黒釉製品、および河北において邢窯・井陘窯の白磁製品・三彩製品が認められることを除いて、ほとんどが墓より出土した生産地不明の軟質土製品である。
- 11) 袁 2002、程 2009、中国科学院考古研究所 1966、西安市文物管理处 1991、付 1999、陳 2013。
- 12) 中国考古学において、とりわけ施釉陶器・磁器が成立・発展した、紀年を伴って出土する例の多い隋唐時代以降の土器研究において、無釉の土器を対象とした系統的把握に基づく研究は盛んであるとは言えない。本稿の研究対象である土製塔式罐は、長安・洛陽周辺の窯跡での出土例がないために、土器系統の視点から製作技術に基づく要素の分析により両京地方内の地域関係を復元することが重要である。
- 13) 今回は紙幅の都合で資料集計のリストを省略する。
- 14) 本稿では幅が最も細い部分を指すが、器形によっては罐座の上面径と同様の場合もある。
- 15) 図9で破線で囲まれた Aa 類の冒頭の個体は、西安市南郊の楊貴夫婦墓より出土したものである(陝西省考古研究院 2016)。副葬の墓誌の記録により、唐の下位官僚であった方州県丞の楊貴は儀鳳二年(677)に長安で死没し、葬送地の畢原で仮葬された後、妻の王氏は洛陽で任職する息子と同居し、証聖元年(695)に死没し洛陽に仮葬され、開元九年(721)に長安に移られて夫の楊貴と合葬されたものとわかる。そして、そこに副葬される塔式罐は、様々な要素から7世紀後葉の楊貴の葬送時に副葬されたものと想定される。それにより、3段の塔式罐の初現について現状で実物が報告された資料で7世紀後葉に遡ることが可能である。
- 16) なぜ罐座の展開が長安と洛陽とで異なる様相を呈するのかについて、現段階に解明が簡単でない問題であり、製作技法・調整技法なども総合的に考察して検証する必要がある。また、在地生産品か搬入品などの罐座の流通、および塔式罐を用いる埋葬習俗も、両地域の差異の背景の解明に重要な側面である。
- 17) 本稿の作成は、高橋照彦教授、福永伸哉教授、上田直弥助教、岩崎郁実氏等諸学兄により、ご助言をいただきました。また、岩崎郁実氏より日本語文章の校正をいただきました。末筆ながら感謝の意を申し上げます。

[引用・参考文献]

- 袁勝文 2002「塔式罐研究」『中原文物』第2期
- 王自力・孫福喜 編著 2002『唐金鄉縣主墓』文物出版社
- 河南省文物考古研究所・鞏義市文物保管所 1996「鞏義市北窯灣漢晉唐五代墓葬」『考古學報』第3期
- 韓朝會 2019「三門峽廟底溝唐墓陶器再研究」『華夏考古』第3期
- 咸陽市文物考古研究所 2003「咸陽機場高速公路周陵段漢唐墓清理簡報」『文博』第2期
- 咸陽市文物考古研究所 2017「陝西武功縣唐代蘇瑜墓發掘簡報」『考古與文物』第6期
- 吳春 1994「西安秦川機械廠唐墓清理簡報」『考古與文物』第4期
- 西安市文物管理處 1991「西安西郊熱電廠基建工地隋唐墓葬清理簡報」『考古與文物』第4期
- 西安市文物保護考古研究院 2012「西安唐殿中侍御醫蔣少卿及夫人寶手墓發掘簡報」『文物』第10期
- 西安市文物保護考古研究院 2013「西安南郊唐代張夫人墓發掘簡報」『文博』第1期
- 西安市文物保護考古研究院 2013「西安市西郊楊家園墻唐墓 M1 發掘簡報」『考古與文物』第2期
- 西安市文物保護考古研究院 2014「唐太府少卿郭錡夫婦墓發掘簡報」『文博』第2期
- 西安市文物保護考古研究院 2015「唐代大理正荀曾墓發掘簡報」『文博』第1期
- 西安市文物保護考古研究院 2015「唐代輔君夫人米氏墓清理簡報」『文博』第4期
- 西安市文物保護考古研究院 2016「西安曲江繆家寨唐代楊籌墓發掘簡報」『文物』第7期
- 西安市文物保護考古研究院 2019「西安南郊唐吳興郡夫人沈和墓發掘簡報」『文物』第7期
- 西北大學文化遺產學院・西安市文物保護考古研究院 2018「西安市東郊高樓村唐墓(Ⅱ M9)發掘簡報」『華夏考古』第6期
- 西北大學文化遺產學院・西安市文物保護考古研究院 2019「西安市東郊高樓村三座唐墓發掘簡報」『洛陽考古』第1期
- 西北大學文化遺產學院・西安市文物保護考古研究院 2020「陝西西安東郊高樓村唐墓(Ⅲ M48)發掘簡報」『文博』第1期
- 陝西省考古研究院・西北大學文博學院 2008『陝西鳳翔隋唐墓—1983～1990年田野考古發掘報告』文物出版社
- 陝西省考古研究院 2016「西安南郊唐代楊貴夫婦墓發掘簡報」『文物』第11期
- 陝西省考古研究院 2011「西安市長安區晚唐時期令狐家族墓葬發掘簡報」『文博』第5期
- 陝西省考古研究院 2013「西安南郊唐渤海郡君高夫人墓發掘簡報」『西部考古』第七輯
- 陝西省考古研究院 2014「唐張泰夫婦墓發掘簡報」『文博』第4期
- 陝西省考古研究院 2017「咸陽市渭城區張閭遺址古墓葬發掘簡報」『文博』第4期
- 陝西省考古研究院 2017「陝西西安立豐惠沱苑唐墓發掘簡報」『考古與文物』第2期
- 陝西省考古研究院 2019「陝西西安灊橋新築蘭家村唐代及明清墓發掘簡報」『考古與文物』

第2期

- 陝西省考古研究院・戸県文管所 2015「戸県兆倫遺址隋唐墓葬発掘簡報」『文博』第5期
- 陝西省考古研究院・西安市文物保護考古研究院 2012「西安鳳棲原唐郭仲文墓発掘簡報」『文物』第10期
- 陝西省考古研究所 2001「西安西郊熱電廠二号唐墓発掘簡報」『考古与文物』第2期
- 陝西省考古研究所・西安市文物保護考古所 2003「唐長安南郊韋慎名墓清理簡報」『考古与文物』第6期
- 陝西省考古研究所 2005「唐范孟容墓発掘簡報」『考古与文物』第2期
- 陝西省考古研究所 2006「西安市南郊馬騰空唐墓発掘簡報」『江汉考古』第3期
- 陝西省考古研究所・富平県文物管理委員会 編さん 2004『唐節愍太子墓発掘報告』科学出版社
- 陝西省社会科学院考古学研究所 1963「陝西咸陽唐蘇君墓発掘」第9期
- 謝虎軍・張劍 編著 2013『洛陽紀年墓研究』大象出版社
- 陳宥蓁 2013『唐代陝西地区塔式罐研究』逢甲大学修士学位論文
- 中国科学院考古研究所 1966『西安郊区隋唐墓』科学出版社
- 中国社会科学院考古研究所 2001『偃師杏園唐墓』科学出版社
- 鄭州市文物考古研究所 2003『鞏義芝田晋唐墓葬』科学出版社
- 程婷 2009『唐墓出土塔式罐研究』西北大学修士学位論文
- 銅川市考古研究所 2019「陝西銅川新区西南変電站唐墓発掘簡報」『考古与文物』第1期
- 范岩・郝紅星 2018「三门峡市印染廠唐墓陶器研究」『華夏文明』第11期
- 付春玲 1999「唐代黑釉塔式罐浅議」『文博』第4期
- 楊萌 2019「唐墓出土の塔式罐について」『古代中国の産業と考古学予稿集』（日本中国考古学会 2019年度総会・大会）
- 楊萌 2020「唐墓出土塔式罐の編年その広がり」『中国考古学』第20号
- 洛陽市第二文物工作隊 2005「唐崔元略夫婦合葬墓」『文物』第2期
- 洛陽市第二文物工作隊 2006「洛陽閩林大道徐屯東段唐墓発掘簡報」『文物』第11期
- 洛陽市文物工作隊 1996「洛陽市北郊唐代墓葬の発掘」『華夏考古』第1期
- 洛陽市文物工作隊 2007「河南洛陽市龍門鎮唐墓発掘簡報」『考古』第12期
- 李軒鵬・李軍 2017「邢台地区塔式罐研究」『中国国家博物館館刊』第2期

[挿図出典一覧]

図面のうち、図3以外であげている塔式罐・罐座・罐蓋は筆者が再トレースを行っている。

図1 譚 1996、Abyse 白地図をもとに作成。

図2 陝西省考古研究院 2013をもとに作成。

図3 [楊 2020]により設定された「A 式塔式罐」における罐座と罐蓋のバリエーションをもとに一部改変。

図4・図6～8・図11～13・表1～2 筆者作成。

図5 1:[陕西省考古研究院 2013]、2:[謝虎軍ほか 2013]、3:[陕西省考古研究所ほか 2003]、4:[河南省文物考古研究所ほか 1996]、5:[西北大学文化遺産学院ほか 2020]、6:[中国科学院考古研究所 1966]、7:[洛陽市第二文物工作隊 2005]

図9 長安 **Aa 類** 1:西安市南郊楊貴夫婦墓(677～721年)[陕西省考古研究院 2016]、2:西安市南郊張泰夫婦墓(721年)[陕西省考古研究院 2014]、3:西安市南郊高氏墓(751年)[陕西省考古研究院 2013]、4:西安市西郊楊家園唐墓M1(8世紀中葉～後葉)[西安市文物保護考古研究院 2013]、5:西安市南郊郭錡夫婦墓(812～819年)[西安市文物保護考古研究院 2014] **Ab 類** 6:西安市東郊高樓村唐墓ⅡM9(7世紀80年代～8世紀初頃)[西北大学文化遺産学院ほか 2018]、7:西安市西郊熱電廠工事現場唐墓M96(8世紀)[西安市文物管理処 1991] **Ac 類** 8:西安市南郊韋慎名夫婦墓((724～736年)[陕西省考古研究所ほか 2003]、9:西安市東郊韓森寨唐墓M605(8世紀後葉～9世紀)[中国科学院考古研究所 1966]、10:西安市高陵県范孟容墓(832年)[陕西省考古研究所 2005] **Ad 類** 11:西安市戸県兆倫遺跡唐墓M22(8世紀50～70年代)[陕西省考古研究院ほか 2015] **Ba 類** 12:西安市南郊沈和墓(738年)[西安市文物保護考古研究院 2019]、13:西安灊橋新築蘭家村唐墓M11(8世紀50～80年代)[陕西省考古研究院 2019] **Bb 類** 14:西安市雁塔区馬騰空村M28(815年)[陕西省考古研究所 2006]、15:西安市南郊郭仲文墓(842年)[陕西省考古研究院 2012]、16:西安市南郊楊籌墓(866年)[西安市文物保護考古研究院 2016]、17:西安市南郊裴氏墓(878年)[陕西省考古研究院 2011] **C 類** 18:銅川市新区西南變電所唐墓M4(759年～9世紀)[銅川市考古研究所 2019]、19:西安市南郊荀曾夫婦墓(797年)[西安市文物保護考古研究院 2015]

洛陽 **Aa 類** 1:鄭州市鞏義芝田郭神鼎墓(732年)[鄭州市文物考古研究所 2003]、2:洛陽市偃師県鄭洵夫婦墓(768～778年)[中国社会科学院考古研究所 2001]、3:洛陽市偃師県鄭紹方墓(810～814年)[中国社会科学院考古研究所 2001] **Ab 類** 4:洛陽市龍門鎮唐墓C7M2668(8世紀10～20年代)[洛陽市文物工作隊 2007]、5:洛陽市李景由夫婦墓(738年)[中国社会科学院考古研究所 2001]、6:洛陽市偃師県鄭夫人墓((792年)[謝虎軍ほか 2013] **Ad 類** 7:鄭州市鞏義芝田唐墓88HGZM47(8世紀20～50年代)[鄭州市文物考古研究所 2003]、8:洛陽関林大道徐屯東段唐墓LNGM3 8(8世紀中葉～後葉)[洛陽市第二文物工作隊 2006]、9:洛陽市偃師県李悅墓(869年)[中国社会科学院考古研究所 2001]、10:洛陽市偃師県崔凝夫婦墓(896年)[中国社会科学院考古研究所 2001] **C 類** 11:洛陽市偃師県鄭氏墓(731年)[中国社会科学院考古研究所 2001]、12:洛陽市偃

師県崔悦墓(745年)〔中国社会科学院考古研究所2001〕、13:洛陽市陳曦夫婦墓(784年)〔謝虎軍ほか2013〕、14:洛陽市高秀峯夫婦墓(819～829年)〔謝虎軍ほか2013〕

図10 1:〔咸陽市文物考古研究所2017〕、2:〔西安市文物保護考古研究院2015〕、3:〔陝西省考古研究院2017〕、4:〔陝西省考古研究院2011〕、5:〔陝西省考古研究所2004〕

(文学研究科博士後期課程学生)

摘要

唐代塔式罐的类型学研究

——以罐座为中心——

唐 丽 薇

塔式罐是一类极富特色的陶瓷器。一般认为其罐盖以及器物整体形态类似佛塔，专用于随葬。因多见于以中国北方地区为中心的唐墓之中，故而也可以说是在隋唐考古学领域受到较多关注的遗物之一。但是，笔者认为至今围绕塔式罐所进行的诸多研究之中还存在如下问题：①因先入为主的完残观而导致资料收集欠缺全面性、进而影响了对某些器形的存续年代、先后顺序以及分布地区的认知；②笼统地对塔式罐整体进行分类，忽略了对其多个组成部分的区别探讨；③偏重于三彩陶器、磁器以及形态繁复且可能具有高规格性的素烧陶器等特殊制品，对极有可能与其拥有不同产地的、大量存在的素烧陶制品的重点分析仍嫌不足；④在型式分类的过程中过度关注外部形态，且多凭借直观感受设定分类标准，缺乏对反映其制作技术差异的内部结构考察以及客观的定量分析依据，进而限制了从技术论角度对其制作技法和工人谱系差异所进行的探讨；⑤分类时对于即使在相对较小的区域内、塔式罐的器形也有可能存在差异这一点未能充分考虑，不利于正确认识和探究器形所体现的地域性差异以及造成这些差异的历史背景。

基于此现状，本文选取作为塔式罐分布中心地带的唐两京地区，特别是以目前对比研究尚不充分的长安和洛阳两地区唐墓出土的、能够显著反映两地区差异的素烧陶罐座为重点试作讨论。通过对内外部器形以及决定器形的诸要素进行综合分析，笔者将上述地区的罐座分为A、B、C三型（其中A型的四个亚型相当于四个式、B型的两个亚型相当于两个式），同时作为探讨塔式罐地域性差异的补充，将罐盖分为A、B、C三型（其中B型的三个亚型相当于三个式），并简要叙述了罐座与罐盖的组合关系。随后，在探讨两地区罐座地域性的基础上总结了出土于长安、洛阳的罐座在不同时期内所表现出的器形演变趋势，并指出今后还需对其进行更为细致的观察，同时也应结合其他考古资料和文献记载，从陶器生产制作的层面推进唐两京地区内各区域间关系和历史背景的复原。